

NHK 実践ビジネス英語

アメリカ人の「ココロ」を
理解するための
教養^{として}**の英語**

杉田 敏

Sugita Satoshi

はじめに — 英語の「ココロ」を理解するために

《ぜいたくは敵だ》

これは、「欲しがりません勝つまでは」「足らぬ足らぬは工夫が足らぬ」とともに国民に耐乏生活を強いる戦時中の標語として知られています。

パーマ (perm, permanent wave) をかけることは「非国民」とされ、「国民精神総動員運動」により西陣織などの豪華な着物地や、首飾りやイヤリング、ダイヤやルビー、象牙製品の製造加工が禁止された時代のことです。東京市内に「ぜいたくは敵だ」と書かれた立看板が多数設置され、「ぜいたく監視隊」なども登場したと言われます。

ただ、一般国民はこうした官製スローガンをただ甘んじて受け入れていたわけではありません。「敵」の前に「素」を入れて「ぜいたくは素敵だ」と揶揄したものもあったということです。

アメリカでも戦時中のスローガンとしては、**Loose lips (might) sink ships.** や **The walls have ears.** が使われました。

loose lipsとは「ゆるい口元」ですが、「(プライベートなことや秘密などをべらべら話す)口の軽い人」の意味もあります。

Loose lips might sink ships. は「口が軽いと船が沈むかもしれない」。つまり、うかつに秘密を口にすると味方の船が沈められるということで、秘密漏洩を戒めたもの。lips – shipsと韻を踏んで覚えやすくしています。

The walls have ears. は「壁に耳あり」で、日本の「壁に耳あり、障子に目あり」と同じ発想です。両方のスローガンとも「スパイに警戒せよ」「秘密は漏らすな」という意味で使われました。

しかし若者たちは、Walls have ears . . . and bottles have necks. などとちやかすこともあったそうです。「……瓶に首あり」と付け加えたのですが、neckは瓶の「首」部分の細い箇所です。bottleneckは「隘路^{あいろ}」のこと。また、The ears have walls. などとも言いました。特に権力の座に就いている人たちなどには、「耳に壁」があって人の話を聞こうとしない、という当てこすりです。

このように洋の東西を問わず、標語があればそのパロディも存在しました。

気を付けてみると、意表をついた短いメッセージはいろいろなところに見受けられます。中にはおやっと思わせるような「名言」「迷言」もあります。

本書には、one-linerと呼ばれるこうした短い文がたくさん収められています。それらの多くは、引用句や警句、聖句、こ

とわざ、シェイクスピアの名せりふ、落書き、広告のうたい文句などをひねったりもじったりしたものです。

ユーモアや皮肉が効いたものがほとんどですが、オリジナルを知らずに、そのまま日本語に訳しても、ほとんど意味をなしません。

使われている個々の単語は簡単でも、その「ココロ」を理解するための「カギ」が必要なのです。そのカギとは、アメリカ人であればだれでも知っている「常識」やcultural literacyと呼ばれるようなもの。つまり、アメリカの風俗、習慣、歴史、迷信、生活様式、それに俗語、しゃれ、同音異義語やかけことばなどを知らないと、理解できないのです。



私がアメリカに留学した1970年代初頭には、道路には bumper sticker を貼った車が多く走り、pin-back button と呼ばれる丸く平たいバッジを服に付けてキャンパスを闊歩する学生もよくいました。

bumper sticker とは車のバンパー部分に貼りつけるステッカーのことで、政治的なスローガンやスポーツチームの応援文句、あるいはつい頬が緩むようなユーモラスなメッセージが記されたものも多く、特に大統領選挙の年には候補者名の入った

ものもよく目にしました。

私の記憶に残っているものとしては、

Enjoy Life. It has an expiration date.

があります。「人生を楽しめ。人生には賞味期限があるから」ということです。こうした何となく哲学的な文句が好きでした。

ある時、キャンパスの中を

I GIVE

A SHIT

と書かれた大きめのバッジを胸に付けた女子学生が歩いているのを見て驚いたことがあります。

shitとは「大便」「ウンコ」のことで、日本を出発する前に読んだ竹村健一著の大ベストセラー『おとなの英語』(カッパ・ブックス刊)に「レディーの前では使えない言葉 —— スラングとタブー語」「絶対に使用禁止の言葉」という章がありshitもその中に含まれていました。

それをレディーが胸に飾ってキャンパスの中を歩いている。それだけでも驚きなのですが、その文句はどういう意味なのでしょう。まさか……。

私はジャーナリズム専攻の学生として、現代英語の語法を確かめるために、その文句の意味を究明しなければなりません。そのためには本人に直接聞いてみるのがいちばん。

ということで、その女子学生のあとを追って呼び止めたこと

があります。相手は突然目の前に現れた外国人の学生に、一瞬緊張して驚いたようですが、「なんだ、そんなことか」とでも言うように、こんなふうに説明してくれました。

「最近のアメリカの学生といえばノンポリで、ベトナム戦争にしろ、政治についても無関心な人が多いの。I don't give a shit, which means I don't care.『どうなったって知ったこっちゃない』ということね。そんな人たちに対抗して、I do care.つまり『私はアメリカの現状を憂いている』という意味でこれを付けているの」。

そう言い終わると、「よかったらあなたにあげる」と言うなり、彼女は自分の胸からそれを外し、有無を言わず私の手に押し付ると、身をひるがえしてホールの中に消えて行ってしまいました。

あとで辞書を引いてみると、give a shitは俗語で「気にする」で、通常はdon't give a shitと否定形で使うことが多い、とありました。

また、ウォーターゲート事件の真ただ中に、Nixon has no balls と書かれたバッジを胸に街中を歩く女性を目にして仰天したものです。「ニクソンにはタマタマがない」ということ。つまり言い訳や隠ぺい工作を重ね、優柔不断で男らしくない。そうしたニクソン大統領に怒りをぶつけていたのです。

アメリカに行って驚いたことの1つは、「レディーの前では使

用禁止のことは」なるものを堂々と女性が使っていることでした。女性の社会進出が進んだ70年代になると、「女性に聞かせてはいけない語」という考え自体が、女性差別とされたのです。

でもそうしたバッジも現在はあまり見かけなくなりました。それにあんなに目についた bumper sticker も……。

どうして見なくなったのかアメリカの友人に尋ねたり、インターネットで検索したりしてみました。すると2008年10月22日付の *Chicago Tribune* の The disappearing bumper sticker という記事が見つかりましたから、このちょっと前あたりから消えていったようです。

いくつか理由があるのですが、「なるほど」と思ったのは、最近の車はバンパー部分がかつてのようにゴムではなく、車体と一体化しているものが多くなったので、貼ったり剥がしたりすることにより車のボディが汚くなることを嫌ったのでは、というものでした。ステッカーを貼る場合には、その場所は後部の窓になり、以前より小さなものが多いようです。

現代ではSNSが、自らの主張を発信するためのお手軽で主要なメディアです。また、いろいろなメッセージの書かれたTシャツやスウェットシャツも市販されていますから、それらを着ることによって自己表現をする人も多くなっています。

SNSに特定の政治家をサポートするような内容の投稿をす

ると、同じような趣旨の文句が書かれたシャツなどの売り込みの書き込みが、数分後にはあるそうです。

bumper stickerなどを見かけなくなったもう1つの理由は、現在のアメリカはトランプ派と反トランプ派に二極化されているので、政治的なメッセージを掲げると車を壊されたり、スプレーでいたずら書きをされたりするというのです。

実際、MAGAキャップを被っていた若者たちが、襲われて袋叩きに遭うという事件も報道されています。MAGAとはMake America Great Againというトランプ大統領のスローガンで、このキャップを被っていれば明らかにトランプ支持者と思われるでしょう。



Tシャツにはありとあらゆるメッセージが書かれています。先日も都内で、

No Beer, No Life

と書かれたTシャツを着た人とすれ違い、ニヤツとさせられました。ただ、あまり過激なものや性的なメッセージが書かれているものは感心しません。

ある時、ロンドンのヒースロー空港で税関の列に並んでいると、となりの列のアメリカ人と思われる若者と係員がもめていま

す。見るとその若者はMARIJUANAと書かれたTシャツを着ていたのですが、税関の係員がそれを脱げと言っているようです。それを着たままでは絶対に入国させない、と強く言われて、その若者は渋々脱いでいました(私は心の中で静かに拍手を送ったものです)。

かつて、トランプ大統領の妻のメラニア夫人が着用していたジャケットに書かれた文句が物議を醸したことがあります。親と離ればなれになりテキサス州で収容された不法入国者の子供と面会するために、ワシントン郊外で大統領専用機に乗り込むファーストレディーのジャケットの背中には、I REALLY DON'T CARE. DO U? と白文字でプリントされていたのです(Uは同じ発音のyouのこと)。

そのジャケットをあえて選んだ夫人の意図をめぐり、米国ではインターネット上を中心にさまざまな憶測が流れました。「本当は移民の子供のことは心配していないというメッセージかも」とか、しつこいマスコミへの「捨てぜりふか」とも言われました。

このジャケットは市販のZARA製のものだということがあとで判明しましたが、これを選んだ本人の思いとこの写真を見た人の「解釈」には差があったかもしれません。



本書では、主としてアメリカの新聞、雑誌、出版物や友人との会話から興味を引かれたものを集めました。そしてNHKラジオ「実践ビジネス英語」などのテキストにGraffiti CornerやJust in Jestの名前で連載してきたものが中心になっています。今回、そうしたものに全面的に手を加え、6章に分類してみました。それぞれの章の初めはクイズ形式になっていますので、ぜひ、Answerを考えてみてください。

著者が意図したのは、「寝転んで簡単に読める本、と思って読み始めたら意外と中身が濃く、楽しく英語が学べるので、途中から座り直して、マーカーでハイライトしながら読む本」です。

2019年12月 杉田 敏

教養としての英語

もくじ

003 はじめに——英語の「ココロ」を理解するために

015 1 ことわざをもじってみれば

045 2 賢者にまつわることばをデフォルメすると

065 3 巷で目にする真の知恵

097 4 ちょっとひねったスローガン

111 5 ことば遊び

149 6 ナンセンス、ハイセンス

本書はNHKテキスト「実践ビジネス英語」などにGraffiti Corner、Just in Jestほかとして掲載されたものから選び、新たな項目を加え、加筆、訂正、再構成したものです。